百々裏話（47）

おもて　あきら

【音曲道歌雑考―その九―】

・歌の漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群中の歌順を示す。

(5)**徳丸肥前高長道歌**（つづき）

口伝廿首

56、曲舞とたゞの謡の変り目は
　舞といふ字の添ふるにて知れ　（三二八）

57、皮肉骨ありといへども謡ひ手の
　習ひ知らねば甲斐なかりけり　（三二九）

58、百番の謡といふも節はたゞ
　十に過ぎぬと言ひ教へけり　（三三〇）

59、曲舞は拍子が躰にたゞ謡
　声を躰にと言ひ教へけり　（三三一）

60、早馬のごとくに謡へ細道を
　踏みはづさじと危きは憂し　（三三二）

61、あがりさがり声を細めつ太むるは
　ひよ鳥の飛ぶ音曲といふ　（三三三）

62、さし声は鼓のあると又なきと
　一声の前又後もあり　（三三四）

63、音曲に訛りひづみも句を切るも
　ゆとるといふも所にぞよる　（三三五）

64、あざやかに一字々々をあら〳〵と
　言ひ流すこそ舌かるき曲　（三三六）

65、師の前と上手の前と晴謡
　心持こそ知らまほしけれ　（三三七）

66、能謡座敷うたひの声ことば
　小路野山も海川もあり　（三三八）

67、ことば論義謡論義も曲舞も
　上げはうけとる心持あり　（三三九）

68、あがる字もさがる字も又引く字をも
　打ちまかせぬを謡ひ手といふ　（三四〇）

69、音曲は口舌心の習よりも
　耳に油断のなきとこそ聞け　（三四一）

70、なけまくる節とて嫌ふ事あるは
　田舎謡に限るとぞいふ　（三四二）

71、五つ引き三つ引くも心得るとは
　二字さがり又二字詰めもあり　（三四三）

72、早春と初秋は時の季の謡
　夏冬はまた逃れ場もあり　（三四四）

73、かいくりてろくの音曲過すたらず
　面白からず拍子に合はず　（三四五）

74、誰も音トタトトトタトの拍子も
　問はずはいかで打ち定むべき　（三四六）

雑井七首

75、習はぬが習ふ振りして謡ふこそ
　師のなき跡に無名伝せん　（三四七）

76、目をふさぎ心を遠くやりうたひ
　見ひらきこ又きろめくも疲し　（三四八）

77、乱酒には長き謡やよき節の
　こもる謡はうたはざりけり　（三四九）

78、こわ色と謡のしほと文字移り
　言葉に何と言ひは伝へん　（三五〇）

79、一声のうちの一声また次第
　ことばもあらば言ひ様を問へ　（三五一）

80、上声や下声といふその内に
　上中下の位有りとは　（三五二）

81、心がけば誰かは知らぬ音曲の
　早きとかろき遅きねばきは　（三五三）

82、音曲は節を忘れて曲を知れ
　拍子も忘れ調子知れとぞ　（三五四）

83、四季に土用五賞（常）には位音曲の
　五音にかろき心はなれず　（三五五）

84、すゝむにはくみして謡へ無碍用と
　身を言ひなすは好かぬゆゑなり（三五六）

85、我（われ）人の三人うたへば師を得たる
　なにはの事のよきもあしきも　（三五七）

86、朝には習ひて暮に忘るとも
　可なりと言ひて謡ひなぐさめ　（三五八）

87、静かなる謡と言ふも矢の如し
　早きを切るも又矢の如し　（三五九）

88、苦しみて習ふも難き音曲の
　生まれながらに知る人はやは　（三六〇）

89、立ち役に道をつくるといふことは
　初脇に限る口伝ありけり　（三六一）

90、脇はただ物の着様と立ち所
　せりを言ふにぞ口伝ありける　（三六二）
91、脇のして太夫の前の大夫かた
　謡に心もちはありけり　（三六三）
92、つけ所油断ばしすな地を捨てな
　謡忘るな身なり崩すな　（三六四）
93、腹の立つ事ありとても謡あらば
　いかにも心うき〳〵と持て　（三六五）
94、歌の道武士の道恋の道
　こもる謡をあだに思ふな　（三六六）
95、さし声の遅れてことば先に立つは
　心の油断口伝なきゆゑ　（三六七）
96、音曲の三重あがりといふ事も
　平家にさのみ変らざりけり　（三六八）
97、ことばにもくどきにも似ず呂の声は
　平家の様に律習ひあり　（三六九）
98、声ほそく謡も弱く油断なるは
　しかと覚えぬゆゑとこそ聞け　（三七〇）
99、恋すてふ道一つほど心がけば
　謡は四つの座も越えぬべし　（三七一）
100、音曲はゆうにやさしく弱からず
　静かにかろくゆる〳〵とあれ　（三七二）
101、後の世も心がくれば悟るとぞ
　安かるべきは謡なりける　（三七三）
102、情こゝろに発すといへば謡ふ時
　異なる事を思はぬぞよき　（三七四）
103、小謡を一番能にうたふ時
　同じことにも替りあるとか　（三七五）
104、神の道仏の道も後前の
　世も知らるるは謡なりけり　（三七六）
105、謡ふ時目のつけ所一畳の
　畳を見越すほどやよからん　（三七七）
106、音曲の覚えを急げ年の矢の
　四十の暮は斜なるべし　（三七八）
107、聞き置きて知らぬよしあし連ぬるは
　叶はぬ謡嘆きしと知れ　（三七九）
108、音曲の道ある時の本ぞかし
　さらずば巻きて懐にせよ　（三八〇）
109、天正二夜も長月にこの歌を
　詠むは徳丸肥前高長
　以上　百弐首

右の徳丸肥前高長道歌は、109の歌によって作られた時期や作者が明らかな点が貴重であるが、残念ながら、作者の徳丸肥前高長については知る所が無い。徳丸が姓で、肥前守を称し、高長が名であつたのであろう。歌に能や謡の術語の使用度が少なく、全般的に素人臭の濃い歌が多いから、作者は玄人ではなく謡の愛好家だつたのであろう。45の歌に宝生家の名が出ている点が作者と宝生流の関係を思わせるが、他にそれらしい歌が無いので、特に宝生との関係が深いとも言えまい。

天正二年と言えば、これまでに紹介してきた他の道歌群が成立した後と考えられるが、それらと同じ歌が全く存在しない点は、「音韻・謡・鼓道歌」と同じである。ただ徳丸肥前高長道歌の場合は、他の道歌との重複を意識的に避けた形跡がさほど顕著でない。抽象的な歌が多いため重複が少ないのであろうか。

29〜31、56・59・82・102など世阿弥の『音曲口伝』の説と関係がありそうな歌が目につくが、これは60〜62、100等の歌が、61が

…機にむらあれば、ひゑ鳥などの飛ぶやうに、謡にあがりさがる所多くてわるく候。又声を細め太むることを嫌ひ候……

の論と承応する如く、金春禅鳳の『五音之次第』に基づくらしいこととともに、作者が、『観世秘伝書』の道歌以前の部分の記事（『音曲口伝』も『五音之次第』も合写）を参照して道歌を詠んでいることを推測せしめる。この事は逆に、『観世秘伝書』の原形成立が天正二年以前であることを想像せしめて興味深いのであるが、それは道歌とは無関係なので立ち入らずにおこう。

（42・1・6）